

呼吸器外科

Department of Thoracic Surgery



呼吸器外科長
伊達 洋至



自ら受けたい治療の創造

2007年10月に伊達洋至教授が診療科長に就任、各種呼吸器外科的疾患に対して、低侵襲手術から高度な集学的治療・肺移植まで幅広い診療を行っている。

原発性肺がん、縦隔腫瘍に対しては胸腔鏡下の切除術を標準とし、根治性を維持しつつ低侵襲に手術を遂行している。2012年度よりRobotic Surgeryも開始。一方、進行肺がんへの導入化学放射線療法や術後補助化学療法、悪性胸膜中皮腫への集学的治療も行っている。高齢化に伴い増加している低肺機能、心・脳血管系合併症を有する患者さんへも安全性に配慮しつつ積極的に手術を行っている。また、本邦脳死肺移植指定施設であり、多数の臨床肺移植も実施している。

代表的診療対象疾患

原発性肺がん、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍（胸腺腫、悪性胚細胞性腫瘍など）、悪性胸膜中皮腫、自然気胸、気腫性肺嚢胞、慢性肺気腫、感染性肺疾患、肺移植対象となる重症肺疾患、生検対象となる間質性肺疾患

診療体制と治療実績

外来診療体制と実績

初診外来と再診外来は毎日あり、毎週月曜日午後には肺移植外来を設けている。他部門との連携としては、呼吸器内科、放射線診断科、放射線治療科と共同で治療方針を検討し、がん患者の外来化学療法も外来化学療法部と連携して行っている。

検査については、内視鏡部にて気管支内視鏡検査を年間約200件施行。通常の観察・生検の他、気管支腔内超音波診断法(EBUS)を利用した経気管支的針生検を約70件実施している。また、微小肺がんに対する術前気管支鏡下マーキングも導入している。

入院診療体制と実績

積貞棟4階38病床で、手術患者の他、術前術後の化学療法・放射線療法、再発肺がんに対する治療、肺移植の適応評価、肺移植後の評価、慎重な管理を要する併存疾患(心脳血管病変・慢性呼吸器疾患・慢性腎疾患な

ど)を有する手術予定患者に対する術前の評価目的の入院を行っている。

2013年度には475件の全身麻酔下手術を行った。内訳は原発性肺がん210件、転移性肺腫瘍71件、気胸24件、炎症性肺疾患23件、縦隔腫瘍21件、肺移植20件、他である。手術もより低侵襲に行われ、2013年は肺がん手術のうち8割が完全内視鏡下で施行されるようになって、平均在院日数も減少を続けている。



先進医療の取り組み

臨床肺移植などの実施

- ◎本邦の脳死肺移植指定7施設の1つに指定されており、2013年度は20例の肺移植(10例の脳死肺移植、10例の生体肺移植)を実施した。
- ◎Robotic Surgery: da Vinci systemを使用したrobotic surgery(写真)を2012年度より実施しており、2013年時点で原発性肺がん12例、縦隔腫瘍に8例の利用実績がある。

多施設共同試験への参加

- ◎3D画像解析を利用した術前気管支鏡下マッピングによる手術支援法の多施設共同研究を当科主導により行っている(当科での昨年度実

績77例)。

- ◎高度医療評価制度を利用したシスプラチン+パメトレキセドとシスプラチン+ビンレルビンの術後補助療法の多施設共同第三相比較試験に参加している。
- ◎希少肺がんである高度悪性神経内分泌悪性腫瘍に対するシスプラチン+エトポシドとシスプラチン+イリノテカンを使用した化学療法の多施設共同第三相比較試験へ参加している。
- ◎スリガラス影が有意な早期肺がんに対する積極的縮小手術の有効性を検討するための多施設共同試験へ参加している。